

学問の進歩には歴史がある。未来を夢みて未知の分野に挑戦した人、必要に迫られて最初に火をつけた人、止むに止まれぬ情熱からその時代の流れを抜け出て新しい方向に向かった人。新しいことをなすにも、それらを発展させるにも、人それぞれ異なった動機があろうが、「胃と腸」ができてから 20 年、現在の繁栄の基礎造りをされた諸先覚者にまず敬意を表したい。

大腸の診断学の進歩も胃の診断学のそれと大綱において変わらない。要は学問のどこに基礎を置いているかである。医学を志すものが最初に学ぶのが解剖学であり、次いで病理学である。神が創造した人間の正常の形態と異常との違いを見付けることが、診断学の初めである。形態学の上に立って、あらゆる方面に診断学が発展してきたという厳然たる事実は、今も変わるものではない。「胃と腸」は、その意味において頑固なまで筋を通し、それが正しかったことを証明した数少ない特色ある雑誌である。

本号の大腸診断学の足跡をみても、X線、内視鏡、病理が後になり先になりして、三者が一体となり新しい形の形態学を作り上げてきたことを窺うことができる。振り返って、その進歩の著しさに目を見張るが、それだけに大きな壁にぶつかっていることも事実である。

これからが問題である。ようやく大腸の診断学も世界で競い合い、それを追い抜く所まで達した。これからの課題は、疾患を減らすための、また治すための診断学をどのようにして作り上げていくかにある。本道は 1 つでも迷路は幾つもある。

形態学は、いつまでも診断学の基礎であることを、これからを担う若い研究者たちは忘れないでほしい。

<西沢 護>

<編集> 早期胃癌研究会

胃と腸

発売予定 4 月 2 日  
定 価 1,700 円

4 月号 (第 20 巻・第 4 号) 予 告

主題／膵・胆道の形成異常

|       |                                                    |          |         |
|-------|----------------------------------------------------|----------|---------|
| 主 題   | 膵・胆管の形成異常と病理                                       | 山梨医大・病理  | 須 田 耕 一 |
|       | 膵胆管合流異常と胆道病変                                       | 金沢大・2 外  | 永川 宅和・他 |
|       | 膵の形成異常                                             | 癌研・外科    | 高 木 国 夫 |
|       | 胆嚢の形成異常                                            | 九大・1 外   | 中 山 文 夫 |
| 主題症例  | 膵・胆管合流異常で術後膵石の形成をみた例と<br>膵管非融合に鉤状部癌の発生をみた例の 2 症例   | 東女医大・消セ  | 大井 至・他  |
|       | 経過中に胆嚢癌を合併した先天性胆道拡張症の 1 例                          | 順大・消化器   | 島口 晴耕・他 |
|       | 膵管癒合不全に総胆管癌の合併した例と膵癌を<br>合併した例の 2 症例               | 旭川医大・3 内 | 鈴木 安名・他 |
|       | Pancreas divisum に発生し、2 年 6 か月間の<br>経過観察をした膵癌の 1 例 | 癌研・内科    | 大橋 計彦・他 |
| 座 談 会 | 膵・胆道の形成異常                                          | 名大・2 内   | 中澤 三郎・他 |
| 今月の症例 | Caroli 病                                           | 名大・2 内   | 乾 和郎・他  |

(担当) 尾島・長谷川・窪田・大竹